『悪魔学』(1597 年)訳註

――承前(2)――

荒川 吉孝[1]

要旨： 以下は、スコットランド王ジェイムズ六世（1603 年以降、イングランド王ジェイムズ一世）の『悪魔学』（1597 年エディンバラ刊）を翻訳し註釈を施したものである。この本は三巻から成り、ここでは第三巻第一章から第三章までを取り上げる。

第一章では、悪霊を四種類に分類し、その第一の種類、即ち、亡霊ないしは死霊の性質と、それが与える苦しみから逃れる方法について説明する。第二章では、次の二種類の霊、即ち、外部からつきまとい人を追跡する霊と、内部に入って取り憑き人を苦しめる霊について考察する。第三章では、所謂「夢魔」に焦点を当てる。

キーワード：亡霊、死者の休息、救済策、死霊 / 生き霊、狼憑き、追跡する霊、取り憑く霊、夢魔

『悪魔学』第三巻　梗概

男性と女性を苦しめるすべての種類の霊[1)]の説明。「対話」全篇の結論。

第一章　梗概

主な四種類への霊の分類。亡霊（スペクトゥラ）[2)]ないしは死者の幻影（ウンブラエ・モルトゥオールム）[3)]と呼ばれる第一の種類の霊の説明。彼らのもたらす苦しみから逃れる最良の方法。

フィロマテス　では先に進んで、何を君が架空のものと思うのか、それとも信憑性があると思うのか、話してくれないか。

エピステモン　あの地中で話をする悪魔は、人を怖がらせ、その肉体を苦しめる方法によって、四つの違った種類に分けられる。魂に与える害については、もう話しているね。

第一に、霊が人家や寂しい場所に出る場合。第二に、霊が特定の人達に付きまとい、色々な時刻に人を悩ます場合。第三に、そうした人達の内部に入り込み、取り憑く場合。第四に、俗に妖精と呼ばれる霊がいる。初めの三つの種類については、それがどのように人の手で、つまり妖術によって操られ、人々を悩ますのか、すでに話を聞いているね。さて、残るは、妖術によって呼び出されるのでなく、言わば自然に現れる場合について話すことだ。が、この論題に入る前に、ひとつ一般論として警告しておかなくてはならないことがある。つまり、僕の話のなかでは彼らを様々な種類に分けているが、それでも、その話し方に注意してほしい。というのも、彼らは事実上、一種類の霊にすぎないのだから。ただ、より多くの人間をだますため、このように色々な形を身に帯び、様々な外面的行動に移るのだ。まるで、あるものは他のものより、その性質上、優れているかのように。

さて、本題に戻ろう。これらの霊のうち、第一の種類は、古代人により、その行動に応じて様々な名前で呼ばれた。例えば、もし彼らが家に出る霊で、様々な恐ろしい姿で現れ、ものすごい音を立てるなら、幽霊（レムレース）[4)]とか亡霊（スペクトラ）[2)]と呼ばれ、もし死者の姿で友人たちに現れたら、死者の幻影（ウンブラエ・モルトゥオールム）[3)]と呼ばれたのだ。こうして、すでに述べたように、彼らはその行為にあわせて無数の称号を持つようになった。我々の言語でも、いかに多くの称号を霊たちに与えているかは、経験上よく知られているところだろう。

このような霊たちの出現については聖書で証明されている。例えば、預言者イザヤは、『イザヤ書』第

1 舞鶴工業高等専門学校 人文科学部門 教授

13章と34章で、バベルとエドム[5]の破滅を警告し、ただ単に破壊されるだけでなく、すっかり荒れ果て、梟とズィームとイーム[6]の棲み処となろう、と断言している。[1] ズィームとイームというのは、こういった霊を表わす正式のヘブライ語の名称だがね。なぜ霊たちが寂しい場所に出るかというと、一人でそういう所に来る者のほうが、怯えさせたり、信仰をぐらつかせたりしやすいからさ。なぜなら、我々は生まれつき、ひとと一緒にいるときは、一人でいるときほどすぐ恐怖にかられることはないからな。悪魔もそれをよく知っているので、無防備なときしか攻撃を仕掛けてこない。そのうえ、神様も、キリスト教社会の名誉を汚すことなど、なさらない。

一方、悪魔が人の住む家を悩ますと、それは住人たちのひどい無知か、それとも恥ずべき罪の確かな証拠となる。神はそれに対し、あの特別な鞭で罰をお与えになるのだ。

フィロマテス　だが、どんな通路を通って、この霊たちはこうした家々に入るのだい。戸や窓が閉まっていても入ってくると言うけれど。

エピステモン　彼らは、そのとき帯びている姿によって、入る通路を選ぶのだ。たとえば、もし死体を装い、そのなかに宿っているなら、どんな戸や窓も音を立てず簡単に開けて入ることができる。また、霊として入るだけなら、空気が入れればどんな場所でも、充分大きな入り口になる。というのも、前に言ったように、霊はまったく量を持たない存在だから。

フィロマテス　それから、神様は、こういう悪霊が復活前の死者の休息を妨げるのをお許しになるのかな。もしそうなら、それは永劫の罰を受けた者に限られると思うのだが。

エピステモン　これ以上に死者の魂が苦しめられることが他にあるだろうか。悪魔が死体を墓から運び出し、しばらくの間、自分の用に使ったり、魔女達が死体を持ち上げて接合したり、豚が墓を掘り返すとき以上に。

聖書が語る死者の休息[7]とは、土地の人がその場所にずっと留まることでなく、この世の旅と苦難とから解放されることを意味するのだ。この世の終わりには、死者の体は再び魂と結びつき、その両方において完全な栄光に包まれる。

悪魔が、人の死後、信仰篤き者の死体を不信心な者の死体と同様、自分の代理として使ったとて、何の不都合もありはしない。なぜなら、死後に悪魔が取り憑いても、死者を汚すことにはならないのだから—魂がそこにないという意味では。たとえ悪魔が死者の名をどれほど汚そうと、それがどうして、善人のこうむる斬首や絞首刑、その他たくさんの恥ずべき死と較べ、より大きな不名誉だといえるだろうか。なぜなら、信心深い人の体でも、名誉に値し自然による腐敗から免れているようなものは、どこにも存在しないのだから。それは不信心な者の体でも変わりはない。やがて、後の世で、彼らは清められ、栄光を授けられる。信仰篤き人が被るひどい病気や腐敗によって日々明らかに認められるように。それは、悪魔に取り憑かれ狂乱した人についてこれから話すとき、はっきりと証明されることが君にもわかるだろう。

フィロマテス　しかし色々な人が、こうした霊の住むとされる場所に足繁く通ったけれど何も見たり聞いたりしなかった、と主張している。

エピステモン　当然だよ。なぜなら、そのようなことを誰に見せ、誰に見せないかは、ただ神のみぞ知る秘密の知識だから。

フィロマテス　だが、こういった霊が人家に現れ住人を悩ますとしたら、それを追い払うには何がいちばんよい方法だろう。

エピステモン　ただ二つの手段によってだけ、救済策[8]は手に入れることができる。ひとつは神に対する熱烈な祈り。つまり霊に悩まされる人たちの祈りと、彼らの属する教会の祈り。もうひとつは罪から脱し、生活を改め、身を清めること。罪こそ、ひどい疫病の原因なのだから。

フィロマテス　では、この霊たちが、死んで間もない人や死にかけている人の影を身にまとい、友人たちの前に現れるのは、いったいどういうつもりなのだろう。

フィロマテス　そのようなときに現れると、我々の言葉では、死霊とか生き霊[9]と呼ばれる。異教徒たちの間では悪魔がはびこり、そのようなときに現れるのは、何か善い霊で、友人の死を予め警告したり、故人の遺志や殺害の状況を明かしたりするのだ、と信じ込ませたのだ。不思議な話を集めた本に書いてあるように。こうして悪魔は難なく異教徒を欺いた。彼らはキリスト教の神[10]を知らないから。それと同じ考えで、悪魔は今、キリスト教徒のなかでも無知な連中の前に、同じように現れるのさ。なぜなら、故人の霊が友人のところに戻ってくることはなく、天使がそんな姿を装うこともないと、よく分かっている者を敢えて欺くなんて、悪魔には到底できない相談だからね。

フィロマテス　例の狼男[11]もそういう霊の一種なのかい。人家に現れて住人を苦しめるとかいう。

エピステモン　確かにそういったものについて昔から説が存在している。それはギリシア人によってリュカントロポイ[12]と呼ばれ、狼憑きの意味なんだ。だが、この点について僕の意見を簡単に言うと、もしそんなことがあったとしたら、それは黒胆汁[13]の過剰から生じた憂鬱症にすぎないと思うよ。もの

の本によると、同じ原因で、ある人は自分を水差しだと思い、ある人は自分が馬だと思い込む。また別の人は、いずれにしろ何かの種類の動物だと思う。だから、狼憑きが意識清明期[14]の人たちの想像力や記憶を損ない、心をすっかり占めてしまうので、そういう時には、自分が本当に本物の狼だと思ってしまうのさ。

こうして狼の行動を真似し、四つ這いになって進み、女や子供をむさぼり食おうとし、町の全ての犬に闘いをいどみ、飛びかかり、他にもそうした獣じみた行動により、ついには激しい不安に襲われ、本当に獣になってしまう。ちょうどネブカドネザル[2][15]が 7 年間そうであったように。しかし、彼らが固い殻のような外皮を隠し持っているというのは、あらゆる偽りの源、あの不確かな「噂」によって尾ひれがついたにすぎないと思う。

第二章　梗概

次の二種類の霊の描写。一方は外から人につきまとい、他方は内部に入って取り憑き、人々を苦しめる。預言と幻はいまや絶え果てたので[16]、こうした形で現れる霊はみな悪霊である。

フィロマテス　さあ、今度はこういった霊のうち、残りの種類について聞かせてくれないか。

エピステモン　次の二種類、つまり或る人々を外から苦しめつきまとう霊、もしくは内部から取り憑く霊については、ひとつにまとめよう。なぜなら、彼らが悩ますことのできる人々の間で、その苦しみの原因は似ているし、その人達を治し、癒す方法も似ているからね。

フィロマテス　そのように悩まされるのは、どんな人達なんだい。

エピステモン　とりわけ次の二種類の人々さ。かたや、重大な罪を犯した者たち。彼らを神はあの恐ろしい鞭で罰する。かたや、国中で見出すことのできる、おそらく最良の性質の持ち主たち。神は彼らがそのように悩まされるままにしているが、それは彼らの忍耐を試したり、熱意を目覚めさせたりするためだ。また、目撃者に自分を過信しないよう警告するためでもある。なぜなら、彼らも人間としては五十歩百歩で、おそらく同じような罪に穢されているから。ちょうどシロアム[17]の塔が倒れて下敷きになった人達についてキリストが語ったように。[3] さらにはまた、目撃者に神を賛美する材料を与えてもいる。自分たちのほうが価値があるわけではないのに、あの恐ろしい罰を免れている、という点でね。

フィロマテス　神様の側にも、悪魔がそのような人々を苦しめるのを認める明確な動機があるようだな。しかし、神が委任するすべての行為において悪魔は常に逆の考えをもっているのだから、この場合、悪魔の目的と標的はなんだろう。

エピステモン　できればそれによって、二つのうちの一つを手に入れるためだ。ひとつは、そのような連中の命を奪うこと。それは、悪魔が追跡するか取り憑くことのできる時刻に、危険な場所に彼らを誘うことによって手に入る。また、神が悪魔にそれを許すなら、彼らを苦しめて肉体を弱らせ、不治の病に罹らせることによって。悪魔が手に入れようとする他のひとつは、彼らの魂の破滅だ。悪魔は彼らを誘惑し、神を疑わせ、冒瀆させることにより、その目的を達成しようとする。彼らが誘惑に陥るのは、悪魔がヨブに対して試みたように、[4] 彼らに対して加える耐えがたい苦痛のためか、あるいは、言うとおりにしたら苦しめるのをやめるという約束のためなのだ。今ではそれは、悪魔に悩まされた若者の告白によって、経験上よく知られていることだがね。

フィロマテス　君はいま、この両方の種類の霊をひとつにまとめて話したので、ぼくは前にもどり、特にこういった種類の一つ一つについて、いくつか質問しなくてはならない。

まず、或る人たちの跡を追う霊には二種類が存在するね。ひとつの種類は、つきまとう人たちを苦しめ悩ます霊。もう一種類は、なにごとにつけ必要とされることで人々に奉仕し、彼らが陥りそうなどんな突然の危険についても必ず警告してくれる霊。

だから、この場合、これら二種類の霊が、地獄に堕ちた邪悪な人々の霊にすぎないのか、それとも後者はむしろ天使で、その行動から明らかなように、特に目をかけた者を援けるため神により遣(つか)わされたのかどうか、ぼくはぜひ知りたい。なぜなら、神ハ選バレタ者ヲ見守ルタメ天使ノ軍勢ヲ送リ給フ[18]、と聖書に書かれているから。[5]

エピステモン　君の指摘するその思い違いがどこから来たのか、ぼくにはよく解る。つまり、無知な異教徒たちがその源なのだ。彼らは神を知らなかったので、すべての人が二つの霊にいつも付き添われていると、自分の想像力で思いついたのさ。その一方を善キ守リ神、もう一方を悪シキ守リ神[19]と彼らは呼んだのだ。ギリシア人はその二種類をエウダイモナ(善霊) とカコダイモナ(悪霊) [20]と呼び慣らわした。両者のうち、前者が人にすべての善をなすように勧め、後者が人をすべての悪へと誘惑した。

だが、幸い我々はキリスト教徒で、漠然とした憶測にはふけらない。だから、よく心得ている。神の善き霊だけがすべての善の源で、何事であれ善いことを考え行なうように導いてくださるのに対し、その反対の方向に誘うのは、サタンと我々の堕落した肉体にほかならないとね。

それでも悪魔は、ローマカトリックの蒙昧な時代、

最初は異教徒の間で続けられた間違いを無知なキリスト教徒の頭に植え付けるため、時折ぼくの言う一種類目の霊に交じって現れたのだ。そして色んな家に出没し、何も悪事は働かないが、家のあちこちで言わば用事をしてくれるのさ。この霊は我々の言葉でブラウニー[21]と呼ばれ、見かけは毛むくじゃら。実際、なかには、だまされて、そのような霊がよく出ると、家はそれだけ幸運なのだと思う者もいる。

フィロマテス　でも悪魔はどんなことをするときも、いつも悪を働こうとする。だとすれば、そうした行為にはどんな悪が潜んでいたのかな。彼らの行動は見た目には善良だからね。

エピステモン　無知につけ込んで人を欺き、自分を光輝く天使と思い込ませるのは悪ではないかね。そのようにして、神の敵を自分たちの友と思いこませるのは。反対に、我々キリスト教徒はみな、キリストが人の体をまとって現れ、使徒たちによりキリスト教会が成立してから、すべての奇跡、幻想、預言、天使や善霊の出現はなくなった[22]、ということを肝に命じなくてはならない。それらは、最初に信仰の種をまき教会を植えるためにのみ役立ったのだ。それに対し、今では教会が成立し、ぼくの話した白馬が征服し終えたので[23]、我々には律法と預言者だけで充分で、それがあれば弁解はできない、と考えられている。ちょうどキリストがラザロと金持ちのたとえ話で語っているように。[6]

第三章　梗概

前述した「追跡する霊」のうち、特に≪夢魔≫[24]および≪女の夢魔≫[25]と呼ばれる種類の霊の説明。これらの種類の霊が世界の北の野蛮な地域に最も多く出る理由。

フィロマテス　次の質問も、やはり君がひとまとめにした二種類の霊の一つ目に関係している。つまり、こういうことだ。君も知っているだろう。一般に伝えられ、書かれていることだが、或る連中につきまとう霊のうち、他のすべてに増して奇怪なものがひとつあることを。それによると、その霊は、自分が苦しめ、取り憑く相手と、肉体の交わりを持つそうだ。だから、これに関し、ふたつの点で君の意見を聞きたい。第一に、はたしてそのようなことが可能なのか。第二に、もし可能なら、これらの霊に性別はあるのだろうか。

エピステモン　男と女をたぶらかすあの忌まわしい悪魔は、それが交わる人間の性により、≪夢魔≫および≪女の夢魔≫と昔から呼ばれている。たぶん、二通りの手段によって、この邪淫は実行できよう。ひとつは、悪魔がただ霊として現れ、死体から精液を盗み取り、そのようにして人々を犯す方法。人間には、まったく相手の姿が見えず、悪魔が挿入する精液のほか何も感じない。物の本によると、そのようにして犯されたため、或る女子修道院は焼かれたそうだね。もうひとつの手段は、悪魔が死体を借りて目に見える姿になり、人間が交わるのと同じように自然に見えるようにすることだ。しかし、どんなふうに使おうと、その精液はあまりに冷たく、犯される人には耐えがたい、ということは注意しておく必要がある。というのも、生きた人間から精液を盗み取ろうとしても、そんなにすぐには手に入らないし、途中で力と熱を失ってしまう。そもそも力と熱は攪拌しないと出てこないのだが、生殖に際して、このふたつの性質をもたらし目覚めさせるのは、まさにこの動作にほかならない。もし悪魔が死体を自分の宿とし、やがてそこから精液を出したとしても、やはり冷たいにちがいない。なぜなら、それが出てくる死体の性質をすでに帯びているから。

さて、君はこうした霊に性別があるか尋ねたが、哲学の原則によれば、簡単に否と答えられる。というのも、生殖用の精子を備えた生物のほかに雌雄は存在しない、というのがその学問の確固たる原則だから。それに対し、霊は固有の精子を持たず、他の霊と交わって子孫を増やすこともないことがわかっている。

フィロマテス　では、様々な怪物がそのようにして生まれたと言われるのは、どうしてなのかな。

エピステモン　こうした話はいわゆる「老婆の話」[26]にすぎない。彼らが自分の精液を持たないことはすでに説明したからね。それに、死体の冷たい精液では生殖できないことは、明々白々だ。体の他の部分と同様、すでに死んでいるので、生殖に必要な自然の熱や、その他の自然の働きが失われているのさ。もしそれが可能だとしても—そんなことは自然のすべての法則にまったく反しているが—怪物ではなく、自然な子を生むだけだろう。ちょうど、男または女と、悪魔に惑わされた人間と、その両者の間に生まれる子供と少しも変わりはない。もし二人とも生きており、たがいに行為を営んだとしてのことだが。なぜなら、そこでの悪魔の役割とは、ただその物質を手に入れて放出するだけだから。したがって、それが悪魔の性質を帯びることなどあり得ない。確かに、悪魔がその技により、凌辱の後、女を孕ませることは可能だ。それは、相手の気分をかきたたせたり、薬草の効力を用いたりするのだが、そうしたことは乞食が毎日しているのをよく目にするね。やがて出産の時がくると、彼女の苦役を大いなる悲しみに変えるため、あたかも自然の成り行きであるかのように、巧みに産婆の手に、木石、もしくは余所(よそ)から持ってきた奇形の子供[27]をすべりこませる。とはいえ、これは僕が信じているとい

うより、世間で話され、思われていることだがね。

フィロマテス　しかし、このような欺瞞が、ラップランドやフィンランド、また我が国の北の島々、即ちオークニー諸島やシェトランド諸島のような、世界の未開な地域にもっとも多く見られる理由は何なのだろう。

エピステモン　なぜなら、最大の無知と野蛮が見られるところに、悪魔は最大の攻撃をしかけるからさ。前に、女の魔女が男のそれより多い理由を説明しただろう。それと同じことだよ。

フィロマテス　悪魔のこのようなひどい惑わしに進んで応じるほど不幸な人間がこの世にいるのだろうか。

エピステモン　ああ。魔女のなかには、進んで応じるよう悪魔に説得された、と告白した者もいる。それにより、悪魔は魔女たちを一層確実に罠にかけるのだ。しかし、ほかの強制された者に対しては、憐れみ、祈ってしかるべきだが、こればかりは、厳しく罰し、嫌悪しなくてはならない。

フィロマテス　君が言っているのは、いわゆる悪夢（メア）[28]のことではないのかな。寝床に眠っている人をとらえるとかいう。君が話しているのは、こういった霊の一種なのでは。

エピステモン　いや。それは自然の病(やまい)にすぎない。医者はそれに対し、「孵化」(incubãtiõ)に由来するあの「夢魔」(Incubus) という言葉を与えたのだ。というのも、それは濃い粘液で、我々が眠っている間に、胸に入り心臓に達し、精気を遮断し、体からすべての力を奪うので、何か奇怪な重荷もしくは霊がのしかかり、押さえつけていると思うからさ。

Ⅰ 原註

[1] 「イザヤ書」第 13 章 ;「エレミヤ書」第 50 章
[2] 「ダニエル書」第 4 章
[3] 「ルカによる福音書」第 13 章
[4] 「ヨブ記」第 1 章
[5] 「創世記」第 32 章 ; 「列王記 上」第 6 章 ; 「詩篇」第 34 篇
[6] 「ルカによる福音書」第 16 章

Ⅱ 訳註

1) 霊　原文では Spirites と綴られ、以後、小文字で表記される。ただし、専ら悪霊（evil spirits）について述べている。その理由は、著者ジェイムズが第三巻第二章の結末近くでエピステモンに語らせる、「キリストが人の体をまとって現れ、使徒たちによりキリスト教会が成立してから、すべての奇跡、幻想、預言、天使や善霊の出現はなくなった」という言葉から推測できる。

2) 亡霊（スペクトラ）　spectrum の複数。幻影、亡霊。

3) 死者の幻影（ウンブラエ・モルトゥオールム）原文では vmbræ mortuorum と表記。umbrae はラテン語 umbra の複数形で「影、死霊、幽霊」の意味。mortuorum は mortuus（死者）の複数属格で「死者たちの」を意味する。

4) 幽霊（レムレース）原文では Lemures と表記。『ギリシア・ローマ神話辞典』（高津春繁著、岩波書店）には次のような記述がある。「… ローマの信仰で死者の霊．5 月の 9 日およびそれにつづく奇数の 11 日と 13 日に家々を訪れて，たたると考えられ，この日にレムーリア Lemuria（レムーラーリア Lemuralia）の祭が行なわれた．この時家長は夜に裸足で戸外に出て，手を洗い，顔をそむけて豆を投げて先祖の魂を戸外に導き出す習慣があった．」

5) バベルとエドム　バベルはバビロンのヘブライ語名で、ユーフラテス川のほとりにあった古代都市。メソポタミア文明の中心として栄えた。紀元前 6 世紀、バビロニア王ネブカドネザルによりユダ王国が滅ぼされ、ユダヤ人がバビロンに捕囚となった事件（バビロン捕囚）が「イザヤ書」「エレミヤ書」の背景にある。

エドムはパレスチナ王国に隣接し死海の南にあった古代王国。旧約聖書でエドム人はユダヤ人の敵とされている。

6) ズィームとイーム　旧約聖書の「イザヤ書」と「エレミヤ書」では、バビロンの荒廃を預言して次のように記されている(新共同訳により引用。以下、特に断らない限り、聖書からの引用はこれに拠る)。

「かえって、ハイエナがそこに伏し、/ 家々にはみみずくが群がり/ 駝鳥が住み、山羊の魔神が踊る。/ 立ち並ぶ館の中で、山犬が / 華やかだった宮殿で、ジャッカルがほえる。 / 今や、都に終わりの時が迫る。/ その日が遅れることは決してない。」

「荒野の獣はジャッカルに出会い / 山羊の魔神はその友を呼び / 夜の魔女は、そこに休息を求め / 休む所を見つける。」

（「イザヤ書」13:21-22 及び 34:14）

「それゆえ、ハイエナがジャッカルと共に住み / 駝鳥がそこに住み着く。/ そこに住む者は、もはや永久にない。宿る者も、世々にわたってないであろう。」

（「エレミヤ書」50:39）

これに対し、16 世紀に広く読まれた英訳聖書 *Geneva Bible* には Ziim と Iim が原語のまま出てくる。(以下、引用の綴りは原文のまま。“long s” は “s” で代用する。)

“But Ziim shal lodge there, and their houses shalbe ful of Ohim: Ostriches shal dwell there, & the Satyrs shal dance there.

And Iim shal crye in their palaces, and dragons in their pleasant palaces: and the time thereof is readie to come, & the dayes thereof shal not be prolonged." (Isaiah 13:21-22)

"There shal mete also Ziim and Iim, and the Satyre shal crye to his fellowe, and the shriche owle shal rest there, & shal finde for her self a quiet dwelling." (Isaiah 34:14)

"Therefore ye Ziims with the Iims shal dwell there, & the ostriches shal dwell therein: for it shal be no more inhabitied, nether shal it be inhabited from generacion vnto generacion." (Jeremiah 50:39)

即ち、新共同訳では、Ziim はハイエナ、荒野の獣、などと訳され、Iim は山犬、ジャッカルなどと訳されている。ハイエナはハイエナ科、ジャッカルはイヌ科と分類は異なるが、ともに夜行性で死肉をあさる。

Ziim は砂漠に住む野生動物を表し、Iim は吠える獣を意味する。ちなみに、本書の著者ジェイムズのもとで英訳され 1611 年に刊行された欽定訳聖書（*Authorized King James Version*）では、Ziim が "the wild beasts of the desert"（砂漠の獣）、Iim が "the wild beasts of the island"（島の獣）と訳されている。

一方、英国国教会で公認された *Bishops' Bible*（1585 年版；1568 年初版）では、上の三か所が次のように英訳されている（綴りは当時のまま、ただし long s は "s" で代用する）。

"But fearefull wilde beastes shall lye there, and the houses shall be full of great Owles, Ostriches shall dwell there, and Apes shall daunce there.

Wilde Cattes shall cry in the palaces, and Dragons shall be in the pleasant houses: and as for Babylons time, it is at hand, and her dayes shall not be prolonged." (Isaiah 13:21-22)

"There shal strange visures and monsterous beasts meete one another, and the wilde keepe company together, there shal the Lamia lie and haue her lodging." (Isaiah 34:14)

"Therefore shall wilde beastes, Lamia, and Cat of mountaines, and ostriches dwel therein: for there shal neuer man dwel there, neither shal any man haue his habitatiõ there for euermore." (Jeremiah 50:39)

動物と悪霊とのつながりについては、『聖書思想事典』（三省堂）に次のような説明がある。「… 獣をもって人類の敵とする考え方は，聖書の宗教思想のなかに一貫して流れており、創世記から黙示録に至るまで，随所に具体的な動物の名をあげて表現されている．… このような邪悪な動物は、悪霊とのつながりをもちつつ（→イザ 13^{21}, $34^{12\sim14}$; レビ 17^{7}），人間の前に現れている．」この「悪霊」は、新共同訳「イザヤ書」（13:21-22 及び 34:14）では「山羊の魔神」と訳され、*Geneva Bible* では the Satyrs（ギリシア神話のサテュロス：半神半獣の森の精）と訳している。一方、バルバロ訳（講談社刊）では「妖精」(13:21) と訳し、「ヘブライ語では大やぎ。廃墟に住みついた悪霊を庶民はこういう形で考えていたが、その他の動物かもしれない。」と註している。

ジェイムズがエピステモンに Ziim や Iim 自体を霊（悪霊）と呼ばせたのは *Geneva Bible*「イザヤ書」（13:21）の Ziim に関する欄外註に拠るものと思われる。以下、その註を引用する（綴りは原文のまま）。

"Which were ether wilde beasts, or soules, or wicked spirits, where by Satan deluded man, as by the fairies, gobblins and suche like fantasies"　≪野生の獣、霊魂、または悪霊。それにより悪魔は人を惑わした。ちょうど妖精、小鬼、またそのような幻影によって惑わしたように。≫

また、*Bishops' Bible* で「イザヤ書」（13: 22）の Iim を Dragons と訳し、「エレミア書」（50:39）の Ziim と Iim との間に Lamia（頭と胸は女で胴体は蛇の怪物）を挿入している点にも影響を受けたかもしれない。

ハイエナの吠え声が悪魔の笑い声に喩えられてきたことについては、*OED* (hyena, hyæna 1) に 1881 年版の *Encyclopedia Britannica* から次の記述が引用されている。

"The Striped Hyæna .. Its unearthly howling .. when the animal is excited, changes into what has been compared demonic laughter, and hence the name of 'laughing hyæna', by which it is known."

7) 聖書が語る死者の休息　天における休息のこと。「ヘブライ人への手紙」第 4 章参照。
また、「黙示録」(14:13) に次の言葉がある。「今から後、主に結ばれて死ぬ人は幸いである…彼らは労苦を解かれて、安らぎを得る。」

8) 救済策　原文には remeid という語が使われ、ハリソン版も古版本のファクシミリ版も綴りは変わらない。*OED* によれば、12 世紀頃の古フランス語から英語に入り、1374 年頃、remede の綴りで初めて英語文献に登場する。語源は remedy と共通し、ラテン語の remedium（薬、治療法、救助策）にさかのぼる。15 世紀以降は、スコットランドでのみ使用される。綴りは、remed, remyde, ramed, remead, 等々。

9) 死霊とか生き霊　原文では Wraithes の一語で表され、語頭は大文字で表記されている。
wraith, n. Orig. (and chiefly) *Sc.*
1. a. An apparition or spectre of a dead person; a phantom or ghost.

b. An immaterial or spectral appearance of a living being, freq. regarded as portending that person's death; a

fetch.　(*OED*)
a, b ともに、初出は 1513 年。なお、*OED* には b の用例として本書のこの個所が引かれている。
10) キリスト教の神　原文にはただ God とあり、語頭は大文字で表記されている。即ち多神教と区別される一神教の神。
11) 狼男　werewolf(s)ないし werwolf(s) のこと。原文では war-woofles と綴られている。語源は古英語の werwulf で、wer は人を表す。民間伝承で、時折ある期間、とりわけ満月のとき、狼に変身する人。
12) リュカントロポイ　lykanthropoi　原文では λυκανθρωποι とギリシア文字で綴られている。ギリシア語の lukos（狼）と anthropos（人）に由来する。
　OED によれば、英語の lycanthropy は 1584 年の初出、「古代の著作家たちにより描かれた狂気の一種で、そこでは患者は自分が狼だと想像し、狼の本能と性癖を持っていた。」初出の文献として Scot の『妖術の暴露』（*Discovery of Witchcraft*）から "Lycanthropia is a disease and not a transformation." という言葉が引用されている。
　ジェイムズはスコットの書物に反駁するために本書を執筆したが、狼男の伝説に関しては、それを妄想だと考えている点で、スコットと同じ見方をしている。
13) 黒胆汁　原文は Melancholie となっている。メランコリー（melancholy）は元来、黒胆汁の意味で、その過剰が人を憂鬱にさせると考えられたため、憂鬱質ないしは憂鬱症の意味が派生した。メランコリーについては、本書第二巻第一章および「『悪魔学』（1597 年）訳註」（舞鶴工業高等専門学校紀要、第 40 号）、註 10 を参照。
14) 意識清明期　原文はラテン語で per lucida interualla と記されている。精神錯乱の間の平静な正気の期間。（per「～の間」、lucidus「光り輝く、明るい」）英語では a lucid interval という。
15) ネブカドネザル　カルデア（新バビロニア）王国第 2 代の王。在位、紀元前 605～562 年。エルサレムを攻略、ユダヤ人をバビロンに強制移住させ（バビロン捕囚）、首都バビロンの復興に力を注いだ。
　原註に引かれている「ダニエル書」第 4 章には狼男の記述はないが、ネブカドネザル王の見た夢で、天使が彼にこう告げる。「その心は変わって、人の心を失い / 獣の心が与えられる。/ こうして、七つの時が過ぎるであろう。」（4:13）彼がバビロンの栄光に驕り高ぶった時、天使の言葉は現実となり、「彼は人間の社会から追放され、牛のように草を食らい、その体は天の露にぬれ、その毛は鷲の羽のように、つめは鳥のつめのように生え伸びた。」（4:30）やがて、その時（七年間）がすぎ、天を仰ぐと、理性が戻り、彼は地上の栄華のはかなさを悟る。
16)　預言と幻はいまや絶え果てたので、…
「ダニエル書」の「…幻と預言は封じられ/最も聖なる者に油が注がれる」（9:24）に言及。大天使ガブリエルがダニエルに語る言葉で、救世主（メシア）の来臨により、幻と預言がその役割を終えることを説いている。また、「マタイによる福音書」でイエスは「すべての預言者と律法が預言したのは、ヨハネの時までである」と語る（11:13）。ヨハネは、先駆けとしてイエスの道を整える者とみなされている。
17) シロアム　エルサレム南東部の池。エピステモンの喩えは「ルカによる福音書」第 13 章 4 節に言及している。バルバロ訳「ヨハネによる福音書」第 9 章 7 節の註によれば、「シロアムの池は、神殿が立っている丘のふもとにあった。幕屋祭のとき、メシアの祝福をかたどる聖水をここから汲んだ。」
18) 神ハ選バレタ者ヲ見守ルタメ天使ノ軍勢ヲ送リ給フ　この言葉（原文斜字体）は原註 [5] の聖書の本文と必ずしも一致しないが、以下、それら聖書各書の該当箇所を文語訳（日本聖書協会『舊新約聖書』）により引用する。
「茲（ここ）にヤコブその途（みち）に進みしが神の使者（つかひ）これにあふ　ヤコブこれを見て是（こ）は神の陣営なりといひてその處（ところ）の名をマハナイム（二営）となづけたり」（「創世記」第 32 章 1～2 節）
「爰（ここ）にエホバの言（ことば）ソロモンに臨みて曰く　汝今此（この）家を建つ若し汝わが法憲（のり）に歩みわが律例（さだめ）を行ひわが諸（すべて）の誡命（いましめ）を守りて之（これ）にしたがひて歩まばわれはわが汝の父ダビデに言し語（ことば）を汝に固うすべし　我イスラエルの子孫の中（うち）に住（すみ）わが民イスラエルを棄ざるべし」（「列王記略上」第 6 章 11～13 節）
「エホバの使者はエホバを恐るる者のまはりに営をつらねてこれを援く」（「詩篇」第 34 篇 7 節）
19) 善キ守リ神 … 悪シキ守リ神　原文はラテン語でそれぞれ *genius bonus* および *genius malus* と表記されている。
20) エウダイモナ（善霊）とカコダイモナ（悪霊）　原文はギリシア語でそれぞれ ευδαιμονα と κακοδαιμονα と記されている。
21) ブラウニー　原文では *Brownie* と表記。
A benevolent spirit or goblin, of shaggy appearance, supposed to haunt old houses, *esp*. farmhouses, in Scotland, and sometimes to perform useful household work while the family were asleep. ≪親切な妖精もしくは小鬼で、毛むくじゃらの姿をしている。スコットランドの古い家、特に農家に出没し、時々、家の者が眠っている間に家事の手伝いをすると考えられている。≫(*OED*)

22) …すべての奇跡、幻想、預言、天使や善霊の出現はなくなった　註 16)参照。

23) ぼくの話した白馬が征服し終えたので
本書第 2 巻第 7 章でエピステモンが「黙示録」（第 6 章 2 節）の白馬による征服に言及している。白馬は勝利の象徴。第 6 章の騎手を、第 19 章 11 節以降に現れる白馬の乗り手と同様、キリストとみなす解釈もあるが、決め手に欠く。第 6 章では、四頭の馬に乗る者がすべて最後の審判を表している、という解説（*The New Bible Commentary,* p. 1178）が妥当と思われる。

24) ≪夢魔≫　原文には Incubi の語が使われ、ハリソン版でも、古版本でも、語頭が大文字で印刷されている。一般に小文字で表記される。incubi は incubus の複数形で、睡眠中の女性を犯すと信じられた夢魔のこと。*OED* によれば、英語には後期ラテン語 incubus から入り、悪夢を意味したが、やがて擬人化され、中世には悪霊として教会法とローマ法に存在が認知されるようになった。「横たわる」を意味するラテン語の動詞 incubāre に遡り、エピステモンの言うように incubation（孵化）と語源が共通する。

25) ≪女の夢魔≫　原文には Succubi の語が使われている。succubi は succubus の複数形で、睡眠中の男性と交わるとされる女性の姿をした悪霊のこと。*OED* には、スコットの『妖術の暴露』（1584 年）から次の用例が引かれている（綴りは原文のまま）。
"The divell plaieth *Succubus* to the man and carrieth from him the seed of generation, which he delivereth as Incubus to the woman." ≪悪魔は男性に対し女の夢魔を演じて精子を受け取り、夢魔となってそれを女性に運ぶ。≫　本書第三巻第三章で、エピステモンはそうした考えに反対し、悪夢を生理的な原因に帰している。

26) いわゆる「老婆の話」　原文では *Aniles fabulæ* とラテン語が使われている。英語では、old wives' tale などという。この場合の wife は woman の意味。「老婆の話」とは、老婆が語るたわいのない迷信じみた話を意味する。George Peele の戯曲に *Old Wives' Tale (1595)* がある。

27) 余所(よそ)から持ってきた奇形の子供　いわゆる「取りかえっ子」（changeling）を指す。「取りかえっ子」とは、さらった子供の代わりに妖精が残していく（通例、醜い）子供を意味する。

28) 悪夢（メア）　原文では *Mare* と表記。*OED* によれば、廃語で、"A kind of goblin supposed to produce nightmare by sitting on the chest of the sleeper; the nightmare itself." ≪眠っている人の胸の上に座り悪夢を生み出すとされる小妖精；悪夢それ自体。≫と定義される。nightmare（夢魔；悪夢）は night と mare の複合語。

参考文献

I. 一次資料

James I of England. *Daemonologie* (1597) / *News from Scotland* (1591). Ed. G. B. Harrison. New York: Barnes & Noble, 1966.

———. *Daemonologie.* The English Experience Series, No. 94. New York: Da Capo Press, 1969.

II. 二次資料

Bible in English (Versions of the Bible):

The Holy Bible [Authorized King James Version]. Originally published in 1611. Cambridge: Cambridge Univ. Press, n.d.

Bishops' Bible. London:1585; 1st ed., 1568.

Geneva Bible. A facsimile of the 1560 edition. Mass.: Hendrickson Publishers, 2007.

Briggs, K. M. *Pale Hecate's Team: An Examination on Witchcraft and Magic among Shakespeare's Contemporaries and His Immediate Successors.* London: Routledge and Kegan Paul, 1962.

Briggs, Robin. *Witches & Neighbors: The Social and Cultural Context of European Witchcraft.* New York, London, Toronto, Auckland: VIKING, Penguin Books, 1996.

Davidson, F., ed. *The New Bible Commentary.* London: The Inter-Varsity Fellowship, 1953; 2nd ed., 1954.

Scot, Reginald. *The Discoverie of Witchcraft.* Ed. Montague Summers. 1930; rpt., New York: Dover Publications, 1972.

Sprenger, Jacobus and Heinrich Kramer. *Malleus Maleficarum: The Hammer of Witchcraft.* Trans. Montague Summers, ed. Pennethorne Hughes. London: The Folio Society, 1968.

上山安敏『魔女とキリスト教—ヨーロッパ学再考—』（1993 年；講談社現代学術文庫、1998 年）

『キリスト教大事典』改訂新版（教文館、1968 年）

邦訳聖書（各版）：

『舊新約聖書』文語訳（日本聖書協会、1972 年）

『聖書』新共同訳（日本聖書協会、1988 年）

『聖書』フェデリコ・バルバロ訳（講談社、1980 年）

『聖書思想事典』（1970 年; 日本語版、三省堂、1973 年）

バッシュビッツ、クルト著、川端豊彦・坂井洲二 訳『魔女と魔女裁判—集団妄想の歴史—』（法政大学出版局、1970 年）

ワ(ママ)イザー、A. 著、石川 立 訳『エレミヤ書 25 章—52 章　私訳と註解』アルトゥール・ヴァイザー監修 ATD 旧約聖書註解 21（ATD・NTD 聖書註解刊行会、2005 年）

（2011. 1. 7 受付）

Daemonologie (1597): A Japanese Translation with Notes

——Continued from my previous article (2)——

Yoshitaka ARAKAWA

ABSTRACT: This is a Japanese translation of the *Daemonologie* of King James, the Sixth of Scotland (from 1567) and the First of England (from 1603). The treatise, which is in the form of a dialogue between Philomathes and Epistemon, consists of three Books. The present issue contains the first three chapters of the Third Book. The First Book appeared in *Notre Dame Seishin Junior College Faculty Research Bulletin,* Nos. 22 and 23. The Second Book appeared in *Bulletin of Maizuru National College of Technology,* Nos. 40 and 43.

The First Chapter of the Third Book divides evil spirits into four kinds, and describes the first kind variously called *lemures* (the family spirit of the dead), *spectra* (a specter or an apparition) and *umbrae mortuorum* (the spirit of a dead person). It also explains the best way to get rid of the trouble caused by them. The Second Chapter considers the next two kinds of spirits, of which the one follows the persons whom they trouble from outside, while the other possesses them inwardly. The Third Chapter focuses on the so-called "incubus".

Keywords: *spectra, the rest of the dead, remedy, wraiths, lycanthropy, a following spirit, a possessing spirit, incubus*